

妹尾義郎日記

(一八九〇——一九六一)

春に第一巻を刊行

いま、現代社会における宗教、という命題が仏教界に

投げかける意味の大きさ、そして、問題の緊急性から関係者の誰人も逃れることはできない。とりわけ、一般から仏教への関心が深まっている現在、仏教界は重大な試験と危機に直面しているといえないだろうか。

そういった時、大正・昭和を一貫して日蓮聖人を敬慕し仏教再興に身命をとした、妹尾義郎（一八九〇——一九六一）の再評価が高まっているのは喜ばしいことである。

「仏陀を背負いて街頭へ、農漁村へ！」

この、直截で力強い、豊かで、美しい意志表示は、昭和六年四月大日本日蓮主義青年団の発展的解消の陣痛の中から立ち上った新興仏教青年同盟の精神的結集軸を表わす叫びである。

日本近代史のなかで仏教が果たした役割のほとんどが、政治権力への屈従、協力であったなかで、妹尾義郎と新興仏教の運動は、仏教が現代社会に生きようとするとき

貴重な指針であるだろう。

その妹尾義郎の龐大な日記が昨年春発見され、この四月下旬、国書刊行会（東京・豊島区巢鴨三の五の一八）から第一巻が出版されることになった。六十冊にも及ぶ日記は第一巻（明治42〜大正9）、第二巻（大正10〜昭和4）、第三巻（昭和5〜11）、第四巻（昭和13〜20）、第五巻（昭和21〜28）、第六巻（昭和29〜36）の計六冊に纏められ、隔月に刊行される。A5判、8ポ二段組のびっしりした内容は、生きようとする仏教の苦闘を物語りつつ、民衆と共に歩みながらめざす社会正義への息遣いでもある。早くも各方面からその刊行が期待されている。